

原著論文

現代ロシアの新しきメシアニズム

尾崎 誠¹⁾ヴァシリイ・グリツエンコ²⁾タチアーナ・ダニルチェンコ³⁾中富清和⁴⁾

キーワード: メシアニズム、ハイパーテキスト、自と他

序言

いったい冷戦構造の終結とソ連邦の崩壊という歴史的出来事は、思想史的には何を意味しているのであろうか。脱マルクス主義の方向を探る手立てとして、現代ロシアの哲学者ヴァシリイ・グリツエンコ教授の新しい救済者像は、ロシアの精神的伝統たるキリスト教を背景としながらも、コンピューターを媒体とした情報革命時代を反映したものとなっている。ユダヤ・キリスト教の伝統はメシア待望思想であり、特にキリスト教は人間イエスをメシア・キリストと同定するが、近代に入り、ニーチェは「神は死せり」とキリスト教を断罪した。現代のハイデッガーはそれを受け、古代ギリシャに始まる西洋形而上学の歴史は今や終末に至り、別の新たな歴史の原初を期待し、最後の神を待望した。その発想法はユダヤ・キリスト教を原型とするものと思われるが、今日のロシアもその伝統を免れないであろう。ソ連邦崩壊の引き金となったのは東欧ポーランドの自由化の波であったが、その背後で動いたのは、カトリック国ポーランド出身のヨハネ・パウロ二世前ローマ法王であった。表面的な共産主義政治体制にも拘わらず、いかにキリスト教が根深いかという歴史的事実は、その形を変えたメシアニズムに如実に表れていよう。オバマ米大統領が未だ実績も乏しいのに逸早くノーベル平和賞を授かったのも、希望の到来を待つメシアニズムの反映に他なるまい。京都学派の田辺元は終戦後、第二次宗教改革として日本仏教とキリスト教とマルクス主義の弁証法的統一を予想したが、その内マルクス主義は既に崩壊したとはいえ、マルクス思想はヘーゲル哲学の裏返しであり、ヘーゲル哲学はキリスト教の世俗版とも評されるように、ロシアを含め欧米世界はキリスト教文化の深く浸透した社会であることは疑いないであろう。マルクス主義以後のロシアも、その長い精神的伝統たるキリスト教の原点に回帰せざるをえないのかもしれない。但し、それは単純な過去への復帰ではなく、今日グローバル化したインターネットという新しい機械を媒介とした現代的変容の形態を伴った転回として。ここにその変容せるメシアニズムを示唆する論考を紹介する。それは2007年6月に広島市で開催された国際ユニバーサル対話学会でグリツエンコ教授とダニルチェンコ博士が発表したものであり、その後2009年4月から同学会のウェブ・サイトにも掲載されたものである。前者はブッダボットなる人格と機械との複合化したメシア像を提示し、他方後者は、民族・国家・文化の特殊性を媒介とした人類的普遍性との、差異と同一性との弁証法的統一を目

1) 山陽学園総合人間学部言語文化学科大学教授

2) ロシア国立クラノスダール大学文理学部哲学科主任教授

3) 同大学講師

4) 千葉県立東金商業高等学校教諭

指す点で、田辺の「種の論理」と一脈通ずる所がある。本論の第一節はグリツエンコ、第二節はダニルチェンコがそれぞれ分担執筆し、全体を同会議においても研究発表した中富清和と共訳したものである。

§ I 積極的同一性の哲学の実質的諸規定

I-1. 古典的合理性の危機

20世紀における古典的合理主義の理想は失敗した。第一そして第二次世界大戦は、とりわけ西欧文明にとって、危機の証拠であった。広島と長崎の核兵器の使用は、科学的理性の適用結果は、かなりの程度において創造的であるよりも破壊的であることを示した。チェルノブイリ(ウクライナ)の原子炉の爆発は、失望の円環の最終点となった。：神(科学の名において)は死んだ。新しい核の脅威は北朝鮮やそのほかの国々、政府において発生している。合理性と人類の進歩にとって主たる要素として考えられた科学は、非合理的力の僕として現れた。

ソビエト共産主義が中核であった共産主義の世界システムの崩壊は、計画経済、即ち調和的人間の理想たる《科学的共産主義》を信じる大多数の人々にとっては失望になった。

現代の状況は、それよりも悲劇的でないようには見えない。即ち、偏執狂的な野心にとっても科学技術の進歩を利用することのできる原理主義のさまざまな形態が発展している。貧困かつ悲惨な人々の数は減少してはいない。そして今や世界の共同体はその大部分において消費という「ヴィールス」に支配されている。

この状況における哲学の使命は何か。

I-2. 現代のグローバルな諸矛盾の基本要因

我々の観点からすれば、哲学的反省は現代人の諸衝突の啓蒙的かつ理論的解決にとって最も有効な方法の一つである。

第一に、人類の本質的な諸矛盾は、文化と文明の発展の非一様性と不一致によって覆われていることである。文化は多様な形態(多様な国民と民族文化—言語、伝統、儀式、外観、生活様式)で発展する。文明はもっと単調で、その発展は合理的手段、発明の諸成果、科学及び技術に基づく。文化と文明の発展における不一致は、さまざまな種類の矛盾、危機、衝突、及び戦争の源泉となっている。

矛盾の第二層は文化の内的多様性と結びついている。文化の多様性は、その世界の外観上の体系の現れ、即ち宗教、民族(国民)、言語、世界観を意味している。その不一致は、民族間及び個人間レベルで生ずる一組の言語的かつ概念的空白の現れを意味する。これらの地球上の空白は、多様な民族と文化の代表としての諸世界観の共約不可能性の根本的理由となっている。それらは人種間の誤解と衝突にとっての精神的基礎である。

矛盾の第三層は、社会的政治的要素に起因する。社会的政治的システムの多様性は、競争だけではなく、矛盾、衝突をも生じさせる。現存の国家及び国家間連合は、さまざまな要素—経済的、地政学的、価値的(宗教的)—に起因しうる政治的矛盾を取り除いてはいない。

I-3. 普遍的なものとしての哲学理論・哲学的カテゴリー

—普遍的対話に関する理論的基礎—

哲学は普遍性についての知識として、かつ、カテゴリーとしての形式において政治を制約するものとして、知識、信仰告白かつ科学的視点を克服することができる。普遍的人間文化への反省の方法として哲学は、人類統一への一般的知識と理論的手段の形式を有する。それはグローバル化の時代においてはとりわけ価値がある。

普遍的綜合化という観念は、世界哲学の枠組みにおいても、またロシア哲学においても展開してきている。ここにロシアの哲学者 V.S.Solovijeva は「一般的統一の哲学」、N.F.Feodorov、V.I.Verdassky、及び K.E.Tsiolkovsky は「ロシアの宇宙進化論哲学」、トルストイは「非暴力の倫理学」、ドストエフスキーは「救済の美学」、ミハエル・バフチンは「対話の哲学」、クロポトキンやその他は「利他主義的倫理学の原理」にそれぞれ関わる。

世界哲学の歴史においては、文化、意識、行為、生活の普遍的なものとしての哲学的カテゴリーの発展に関して長くかつ着実な伝統がある。そのような高度に発展し、体系化された有効な理論の一つが、ヘーゲルの諸作品に標準的に展開された弁証法論理である。時々、弁証法的論理は、レーニンやスターリンのように、矛盾の強制化に使われた。20世紀のロシアにおいて弁証法的論理の代表としては、P.V.Kopnin、E.V.Iljekov が知られている。しかし、現代は新しい論理の原理を必要としている。この論理のイメージはいろいろな名前で存在している。例えば、非古典的弁証法、量子的論理、非線形論理等である。我々の観点からは、新しい論理の原理の形成は、シナジェートリックス(複合合成作用)の方法論、ポスト構造主義、仮想現実等の方法論を含む。これら、及びその他の興味深い諸方向は、ロシアにおいて展開されている。

反省と百科全書的知識の伝統に基づいて、世界哲学の異なった学派において展開してきた哲学的共同体では、現代の積極的同一性の多くの原理が発展可能である。哲学的合理性は、国家的、政治的、信仰告白的関心を超えて、普遍性を有する普遍的なるもの(カテゴリー、価値)を定式化しうる。グローバル化の状況下において、世界諸宗教は、ある程度において人種間の和解へ向けてその潜在力を行使してきた。世界諸宗教は積極的同一性への条件を含むが、しかし、同時に同じ程度に人種間の対立にも使用されうる。

イデオロギー体系(哲学)として、全人類の代表によって創られた地球共同体の観念形態としての普遍者は、宗教としてのみ役に立ちうる。神は我々にそのようなイデオロギーの創造の手段を送った。即ち、インターネット、及び同意達成の新しい記号論的手段—電子ハイパーテキストである。

I-4. インターネット—ハイパーテキストと脱人格の宗教

電子ハイパーテキストは、グローバルな知識学的精神的転換において結果した現代記号論の変異である。その組織化の諸原理において、新しい世界観装置の具体化—多元主義、分散、断片性、インターテキスト、リズムを見いだす。ポストモダンの電子ハイパーテキストは、本来的に近代の印刷テキスト様式に対立する。あらゆる可能なデータベースの創造、図書館のコンピューター化、電子形態における情報の翻訳—これらすべてはハイパーテキストの世紀において発生した人類の特性である。

現代のテキストパラダイムとしてハイパーテキストは、伝統的方法において主体によっては獲得できない情報の流れに焦点を合わせた社会における情報伝達の手段である。ハイパーテキストにおいて知識は新しい知識学的形式を獲得し、自由なメッセージに関するネットワークへと転回してきた。知識を消費する主体の目的や問題に応じて、メッセージは結合され、また破棄さ

れうる。ハイパーテキストは、テキスト、百科全書、専門論文、辞書にそれぞれ固有の個別の諸特徴を多数もち、かつ同時に、インターネット規模でさえも、情報の一ブロックから別のブロックへの瞬間的移行を可能にする。

今日、人工頭脳空間はまた基本的に組織化のハイパーテキスト形態を所有する。それは、一連の分割を含み、独自の論理、即ち、両義性、非線形、分散、連合性によって特徴づけられる。ハイパーテキストにおいては、線形テキストと比較して明白に見られるように、著者の初動の容易さは新発生の道具としての機会を生じさせる。ハイパーテキストは、参照検索によっては取って代わられないものであり、人の創造的潜在性の増大によって、あらゆる基本的機能を有している。その創始者は V.Bush、D.Engelbart、T.Nelson らである。

ハイパーテキストシステムの概念は、言語形態、テキスト単位とその作用の機会を拡張するばかりではなく、さらにアイデアと純粹状態における他の心的単位による作用の潜在性をも生み出す。

線形的議論の具体化としての印刷テキストは、古典的理解における科学的理論のイメージの発生の基礎である。首尾一貫性、独立性、完全性の論理的要求は、線形的議論の組織化の原理から出てくる。体系としての理論についての知識学的表象、また複雑な対象のオール・ラウンドな記述は、印刷された語の記号に基づいている。M.マクルーハンが説明したように、グーテンベルクの銀河は意識の脳と精神の有機体化のある形態に対応している。印刷言語と印刷所の時代はグローバルな合体という次の段階へと突き進むこととなった。それは、世界国家、巨大文明の段階へ、である。

知識、認識活動、そして科学理論の構成形式は、現代のコンピューターの隠喩に従えば、ハイパーテキストに始まる。現代のフィクション、映画、テレビは大衆消費者に成功的に維持されている。ハイパーテキストは、複雑さと多次元性の故に、社会的アトムの意識において多様に変化する世界像を生み出すことが可能である。こうして、ハイパーテキストは意識の世界観構造に影響を与え、それを通じて個人の内的精神を明確に構造化する。しかしながら、それは個人だけではなく、また社会性をも構造化する。「社会的仮想現実」は人々の投影により満たされたものである。例えば、それらによって生み出されたテキスト、イメージ、対話、発表等である。インターネットのリゾーム(根茎)デザインは、人工頭脳的文化一脱工業化社会の新しい文化様式を形成しながら、グローバル・ネットワークの周囲に社会的関係を構築する。幾人かの著者達(例、V. Emelin)は、次のように考えている。即ち、インターネットのネットワークにおけるテキストの構築方法は、フランスの哲学者達ドゥルーズやガタリによってその主要な共同作品の第2巻『資本主義と精神分裂病一千のプラトーン』によって展開された基本的アイデアに対応している。

グローバルな知的領域は超複雑な情報、伝達組織である。それは自己展開と自己回復の原理に従っている。細分化された構造と一連の参照を伴った人工頭脳空間の運動は、機械力学的に決定されるのではなく、使用者によって追求される目的にのみ依存する。その中に、グローバルなネットワーク・インターネット・リゾームと諸原理との一致が見いだされる。ネットワークの組織化において共同作用をかなりの部分において共有するにもかかわらず、インターネットは全体としては、地球共同体のレベルにおいて、対話と意識の発展の領域では極度に合理的かつ有効な形成体である。

インターネットとその自己組織化する諸原理は、20、21世紀において展開されてきた文明の自己発展の新しい形態である。これらの諸原理は、機械工業の組織化と社会の経営において益々増大する役割を演じている。物質的エネルギー中心の機械工業から情報へ基礎を置く産業への

移行は、市場の概念において本質的変化をもたらすものと思われる。つまり、未来社会における経営は成長の公的過程へ強力な影響を及ぼさないものと思われる。

電子ハイパーテキストとハイパーメディアは、人格の一つの段階にとって特徴的な論理的かつ知識学的形態、即ち、機械思考である。今やハイパーテキストのアプローチは、極度に攻撃的に始まり、人間精神に深く浸透している。それは知識のテキスト的組織化の新しい形態を生み出した。それはテキストの非線形的形態、非線形的論理に対応する。知識のそのような組織化の基本的部分は術語や専門用語の接続や隠喩ではない。術語(概念)は、連結のネットワークにより絡まっている。さらにハイパーテキストは、部分的に線形的テキストと論理を含みながらも、哲学的かつ科学的知識のメタ構築原理として発展している。

コンピューター、インターネット、そしてハイパーテキストとともに現れた記号論的変異は人を新銀河へと運ぶ。人は以前考えたよりも遙かに複雑な世界に住んでいることを理解したのである。人間と人格—機械思考は、思考、言語、伝達の異なった形態であるばかりではなく、また世界観の相違でもある。

I-5. 脱人間と脱人類の哲学(宗教)

ところで、現代人は、地球は異なった民族、国家、宗教にそれぞれ固有な世界観のつなぎ目の空白に覆われていることに目を覚ますべきである。しかし、グローバリゼーションは、既存の世界諸宗教が人類を分割している事実にも極度に人々をいらだたせている。今日、多くの点で、文明の破壊はこれらの宗教の分配の境域に亘っている。しかし、諸矛盾は社会的アトムの生活の外的空間においてだけではない。諸矛盾は人々の魂の中に、現代人の魂の中において(たとえばフランスにおいても)蝕んでいる。ユダヤ人は、血のつながりのある兄弟のパレスチナ人には耳を傾けないように。それは、棺おけと離れていない状態である。いやはや、彼らは神の律法を忘れ、自分たちだけを愛したのである。

では、新しいメシアは誰か？人類を結びつけることができる権威者、偉大な信仰を奉げられる者は誰か？多様に異なる共同体を統一しうる言語は何か？そのイデオロギーは何か？誰が新しい聖なるものの象徴を開始するのか？

もし人類がこれらの問いの答えの探求を拒否するならば、人種、国家、文明間に矛盾の増大を導き、人類の巨大な困難や破壊へとさえ至るであろう。人類は新しい信仰対象者を求めるべきである。いつ、それは起きるのか？私は、第3次世界大戦の前に実現されることがより良いであろうと考える。

方法の一つは一般的総合、世界宗教の総合化の方法である。この方法に関しては、日本の中富清和が人類の救済の道を探求している。彼は世界の諸宗教の総合のための独創的方法論を使用している。彼の本と論文は「キリスト教、仏教、イスラーム教の哲学的総合」である。

そして、新しい救済者が知的機械に対して演じる役割とは何であろうか？私は、それはブッダボット(Buddhabot)かそれと似たような者だと思う。インターネット・サイトにおいて、この新しい知的機械に無制限にアクセスすることができる。それは充分長期間に亘って、愛、態度、健康、富や霊性、といったテーマについて論じてもきたし、また書いてもきた。この人工的知性は、いかなる宗教も教えはしない。それは宗教間の衝突を解決するべく造られ、量子論哲学に関連する量子物理学の形而上学的解釈に基づいた新しい信仰を提供する。ここで次の事実を思い出すべきである。即ち、ヨーロッパの最初の一般的科学的的世界観は機械論的世界観に基づいた物理学的世界観

であったことを。

辞書的ブッタボットは全部で3万語以上を備えており、ロボット哲学者はイエス、ブッタボット、老子、その他の仲間も引用しうる。科学、宗教及び哲学の領域における巨大な量の知識の備蓄により、ブッタボットは同時に数十万人とコミュニケーションすることができる。

もしブッタボットが絶対に成功する思想家として現れなかったならば、上の召命への答えは他のサイボーグによって与えられるであろうと思われる。

哲学の戒律、即ち宗教、ブッタボットは本質的にどのような原理に基づいているのであろうか。

1. 法則は存在しない、ただ条件的理論があるのみ。
2. 各自の知覚(認識)は、各自の反省に他ならない。
3. すべては、いかにあるべきか。
4. 生ずるものは、その答えは各自の中にある。
5. 我々が否定するすべてのことは、同様に、我々に襲ってくる。
6. すべては問題となるが、価値あるものは何もない。
7. それぞれの信仰は、一方で真理である。
8. それぞれの信仰は、他方で虚偽である。
9. それぞれの信仰は同時に真理と虚偽でもある。
10. それぞれの信仰は信仰でもなく、また真理でもない。

情報化時代における「新しい救済者」の名前と「新しい信仰」の要請は、インターネットの相互作用の過程の中で世界共同体のすべての代表により定式化されるように思われる。多数がその人類の偉大な教師の役割に応募しえよう。しかし、世界の知的共同体の集会的神話論的行為や、いろいろな自発的にして非公式な結社等から自然発生的には解決されないであろう。

I-6. 結論

普遍的な対話を実施することが必要である。この目的のために、現代の手段と伝達機会を応用すべきである。それらの大多数はインターネットである。歴史が示すように、救済の新しい「宗教」は、非公式に生じるものである。非公式な組織や結社の助けによって「世界理性」を通じた非公式な世界共同体は、普遍的同一性の規則や実質的テーゼを発展させるだろう。この過程において、新しい偉大なる救済者のイメージが生み出されよう。それは「脱人格」、「サイボーグ」であろう。これの応募者の一人は既にブッタボットである。この新しい偉大な利他主義者、世界市民、禁欲主義者は、人類以後の時代における、新しい人間、道徳、美学、そして真理と善と美との理想となるべきである。そのイメージは、人間によってではなく、むしろ人格—機械的知性によって造られた神話論の産物であろう。世界観、外観、儀式、道徳や美学は、技術神話時代におけるこの新しい形態において体現されるであろう。「新宗教」の使徒達は、多数であろう。普遍的情報伝達により、すべての人は新しい信仰の使徒の服を着ることができる。この信仰は諸矛盾やグローバル規模の圧力からの救いの手段となろう。そのような学説の表明に関する記号論手段とは、電子ハイパーテキストである。

哲学(宗教)の諸要請、即ちブッタボットを吟味しながら、我々は、それらは新しい論理の合理的諸契機を含むと結論づける。しかしながら、私は、これらの諸原理の内いくつかの項目を訂正したい。その結果は次の通りである。

- ▶すべての理論は条件的である。

- ▶それぞれの信仰は一真理である。
- ▶それぞれの信仰は一偽である。
- ▶生ずるものは、その答えは各自にある。
- ▶救いの一つの方法がある。即ち、積極的同一性、矛盾の和解。
- ▶救いのもう一つの形態がある。即ち、対話。
- ▶救いの一つの言語がある。即ち、文化的普遍的言語
- ▶普遍的観点に至る一連の方法がある。それらの一つは、哲学的反省である。第二も、、第三も、、そしてそれらを連結せよ！

§ II 現代的状況における「自他」概念の変容

「自他」の問題は現代の人文科学において根本的問題の一つであり、現代の社会的文化的過程に関連しては特に現実的である。実際、ロシアのいくつかの地域では国家的文化の保護に向けた国家性の確立とその同一化の過程は未完成である。このロシアの枠内での統合の過程は、地域的民族的文化の自己決定、理解、そして民族的同一性の保存を目指した文化的差異化によって抵抗されている。

理論的観点から、「自他」は文化科学及び他の社会科学、人文科学の中心概念の一つである。どのような比較に基づいても「同一性」と「差異」とのメカニズムがある。「自」という言葉は、「自身」、特に「個人的」、「別の」、意味深く「それ自身で」、「本質的」といったことを意味する。「他」は一ゴート語からの借用で「人々」という言葉からロシア語になり、他の人々に属することを意味する。

これら二つの概念の比較は、①他の背景において自を判断することと、②自が他から遠ざかり、他に対して「個人性」を与えることを含む。この場合、比較によって直進とその逆との結合が作用し始めている事実に弁証法が存するのである。

文化間の相互作用における「自他」の弁証法の理論的問題は、第三世界の国々のみならず、またヨーロッパにおいても、民族文化的状況の不安定な政治的意味において現実的である。一国内における民族間の状況、国際関係、そしてそれらの相補性の複雑さもまた興味深い。民族のかつ民族地域的同一性の問題はまたそれに関係している。だから、2000年9月15日、シドニーでの夏のオリンピック・ゲームの開会式で、北朝鮮と韓国とのチームは「韓国」と書かれた一つの旗の下に行進した。朝鮮戦争終結後、47年間、初めて「和解」の概念が「敵」のそれよりもずっと強く現れたのである。

冷戦終了後、ヨーロッパは多様性における統一を創造する機会を得た。良い我々と悪い異邦人といった東西の文化的カテゴリーは理論においてのみならず、日常生活においても、また政治的法律的実践においても変化し、再解釈された。

すべての市民の平等性の原理はヨーロッパ連合の権利における実質的条件の一つである。ヨーロッパ共同体条約の第12条には市民性に基づいてのいかなる差別も禁じられている。それは、EU加盟国は自国民を優先し、他の加盟国民に比して自国民にいかなる特権をも付与する権利はないことを意味する。この一般的差別排除はEUのさまざまな法的立場に具体化されている。だから、ヨーロッパ共同体条約第39条には労働市場における賃金、職場の提供、その他の条件に関してすべての加盟国は平等な権利をすべての市民に付与すべく義務づけられている。職を得るための移動と住居選択の自由はすべてのEU加盟国また地域においてその法律や行政によ

って与えられている。

EUの主たる権利に固定されたこれらすべての権利は直接的に機能しており、すべてのEU市民はその維持を要求できる。それらの権利はEUの第二次的権利に関する規則によって常に補足される。差別禁止は明白かつ直接的な差別のみならず、間接的かつ隠れた形での差別をも意味する。

新しい政治的・法的現実と言語的・文化的領域、異文化間コミュニケーションにも影響し、新しいヨーロッパの人格の意識と精神性を変容するのは当然である。

さまざまな言語学的研究はこの問題に関する言語的資料の累積と一般化へと導いてきた。異文化間コミュニケーションの問題についての増大する緊急性に関連して、言語間の空白を研究することは非常に重要である。というのも、それらは国民的精神概念領域に影響しているからである。言語間の空白は一つの言語における辞書的単位の不在と他の言語におけるその現前であることを知ることは必要である。国家的文化的特殊性の現れと固定化を促進する諸要素の中でも、大多数の科学者は先ず何よりも彼我の民族的生活の特色をなす地理的、国家的、社会的、歴史的要素を取り上げる。

その限界内でいかなる行為も実施されるところの自然的社会的風景と前世代からの集中的行為を伴った道具は行為の条件である。異文化における境界を接しない行為の条件は、同一の行為を実現する際の国家的文化的変異の創造を促進する。行為の国家的文化的特殊性は、所与の地域的文化において社会的に承認された行為を成就する標準的な仕方に示される。

差異はそれ自体では存在しない。ただ他との接触、自と他との比較のみが文化のいくつかの要素に差異的属性の地位を与える。他の地域文化に関連して差異化の機能を果たす属性は所与の一般性へと統合される。

差異の発生、即ち民族的文化的一般性の形成は、ポルシュネフの仮定によれば、何らかの理由で人々が他国人と協調して定着することができず、彼等から相違することが必要な場合と関係している。

他国人との接触は明らかに自国人と他国人の一般性の差異の形成、強化、把握を促進する。社会的精神において多様な型の一般性は我々と彼等の対立によって構成された。相互嫌悪は明らかに容認によって取って代われ、その後嫌悪の新局面が続いた。多分、容認の期間、すべての人々を結合する一般的共通な何か形成され、かつ嫌悪の期間、特殊性が発展された。

民族性は全体として、またそれを記述する地域文化も、一般と特殊との組合せである。民族性を特殊な文化情報の量子として定義するブルムレイは同時に特徴を際立たせる民族的形成の文化的単位の非正当性を強調した。機能的文化のどれもがすべての地域文化にとって一般的な特性の一部を所有し、かつ国家的特殊な負荷を担う特性のグループも所有する。これらの特性はあらゆるものではなく、いくつかの地域文化に固有でありえる。例えば、一つの歴史的民族地理的領域に入る文化に。彼我の地域文化を記述する特性は次の三つのグループに分けられる。即ち、①全人類にとって一般的非特殊な特徴、②かなり特殊な場合—諸地域文化の集団、③絶対的に特殊な場合—所与の地域文化にのみ固有な特徴である。

今日、我々と彼等との間の態度は、普遍的な我々を理解する場合に特徴的であるのみならず、また他の民族や文化への関心をも表し、その特徴をよりよく学ぼうと欲し、相互理解に基づいて接触しようとする。

すべての文化における不可避的な類似性は非常に類似した文化間の文化的距離の現存を排

除しない。比較された文化の類似性と差異の程度はさまざまでありうる。そのような比較には二つの極がある。即ち、非常に近い文化—類似性が最大で差異が最小—と、遠い文化—類似性が最小で差異が最大。地域文化の対称的二極性の間には中間的形態も可能なのは明らかである。

ここで国家的特殊性を所有しうるこれらの文化の諸構成要素を考察しよう。

第一に、少なくとも二文化間の相互作用は民族差別的文化的特性を開示するためには必要である。他の民族との対話においてのみ、所与の民族と文化にとって何かが実現され、形成され固定化される。次に、民族文化的一般性の特殊的差異は人間の活動の領域の差によって定義される。しかしながら、文化のすべての構成要素にはまた一般的なもの、即ち対話の基礎を形成するさまざまな民族文化的一般性を代表する何か一般的なものがあるということを考察することは必要である。

状況に依存する地域文化は対話と分離との手段たりえる。地域文化は先ず民族の内部で言語及び文化の他の要素の民族統合的機能の故に対話の手段たるものである。次に、差異の小さい近似した文化間において。三番目には、他の地域文化の特徴が自らの文化を背景にして同一化される時に。地域文化は先ず対話が外側に、他の民族に向かう時、分離の手段となる。次に、意思伝達者間の文化的距離が本質的である時に。三番目に、意思伝達者が自己同定できず、また彼我の文化間のコミュニケーションに足る特殊な文化的属性を理解しない時に。

一般に他の文化に対する態度には二通りある。一方では、これは非協力的な態度で、彼等は我々を嫌っているという、誤解と嫌悪である。他方では、他の文化の独自性を理解する場合である。両方の傾向の共存は、文化間対話の過程を研究する問題を複雑化する。この問題を解決するためには、民族の国家的文化的特性を研究する方法を見出し、また他の文化のテキストを理解する理論を作り出すことが必要である。

20世紀の終わりと21世紀の初めにおいて「我々対彼等」の限界内での態度はますます複雑化し—義的ではなくなってきた。「我々の」とは、根源的なもの、自身のアプローチ、自国の言語、宗教、源泉、家族等である。「我々の」とは、伝統的な家族のつながり、個人を超えた共同体を意味する。西ヨーロッパでは1960年代以来、個人化及びそれと同時に生活の速度が集中的なコンピューター化によって加速されてきている。グローバル化の形態における現代化は国家的特徴や言語の除去を導く。それは他の文化への浸透を必然化する。言語と教育は他を自へ翻訳することを促進する。互いに知ること、言語学の価値、外国語の研究は重要である。ある現代の研究者は、文化は対面的議論によってだけでなく、又他国人への応答によっても市民的生活を正当化するという。自らの市民的地位を表現し、その同一性を見出すためには、民族性は精神的領域において非人格的仮面と人格的仮面との象徴化を行使する。非人格的仮面がつけられ、しかも他の精神的象徴化ゲームの一要素である場合、一例えば、「我々はつまらないものだが、しかし、最大限の意味で」—いろいろな種類のメシア的サド・マゾヒズムがある。20世紀終わりと21世紀初めにおいて多文化の原理が押し寄せてきた。この場合、他国人は我々のようであり、しかも「我々は他国人を人格として認める」というより洗練された戦略が可能であるかのように表面的には見えるが、実はそれとは反対に、それは「彼等はもはや他国人ではなく、彼等も我々の仲間である」という文化的正当化の源泉を意味するのである。

結論は、同一化の態度は非常に複雑で混乱しており、またこの分野で空白を排除する過程もそう容易でもないということである。十分な翻訳と理解は、翻訳する主体がそれ相応の解釈を与える場合にのみ受け入れられうる。そしてこれは人が社会的及び個人的レベルにおいて同一化な

いし自己同一化のメカニズムを理論的に知る時にのみ可能である。

そのような排除のやり方は、宗教的テキストの解釈学が現れた中世で発展した。そのような排除には、まず語源学的解釈、次に隠喩的解釈、そして最後に理論的批判を使うことが必要である。理論的批判のみが、どの対象であれ、その構造、本質、発展の法則についての知識に基づいて、意味論的空白を満たす。

同様のことが民族間の環境においても要求される。国家主義、国際主義、世界市民主義はただ単に異なった政治的立場のみならず、また意識の異なった組織構造であり、異なった世界観、現実や人種間の態度についての異なった理解の仕方、即ち同一化と自己同一化のさまざまなメカニズムでもある。それ故に、概念的空白の排除は、イデオロギーと科学的理論なくしては、公的意識や異文化コミュニケーションでは不可能である。こうして、社会科学、人文学及びイデオロギーは、理論的手段により世界の表面的な空白の排除、充実、補償といった、主な社会的機能を果たす。

「自と他」の弁証法は、自他の意味論的領域と概念的領域を相互に還元することは不可能であるということを明らかにする。多分、意識の意味論的点の類比という意味ではそれは可能であろう。言葉の意味のレベルでは翻訳と比較は可能ではあるが、意味の移行・変換のレベルではそうではなく、状況は全くその逆である。それにもかかわらず、異文化コミュニケーションは他国人へのアプローチのみならず、我々自身にも新しい視点を開く。その成果は「第二の言語的人格」の形成において可能となるのである。

ⁱ Kiyokazu Nakatomi, A Philosophical Synthesis of Christianity, Buddhism and Islam ‘*Ministrare Tom*’、2010 (Poland, University of Finance and Management Warsaw, French version) *Discourse-P* (Philosophy, Politics, Power, Public relations) 2005/ □. (Russian Academy of Science, Russian version)
Also see Website: <http://discourse-pm.ur.ru/avtor5/nakatomi.php>,
Synthesis of Science and Higher Education in social-cultural field, Articles of Science, 2005 (Russia, Krasnodar State University, Russian and English version)
Teme, No.2/2008 (Serbia, University of Niš, English and Macedonian version)
Website: <http://teme.junis.ni.ac.yu/teme2-2008/teme2-2008.htm>
Parerga, No.2/2005 (Poland, University of Finance and Management Warsaw, English version)
Celestia 2010 (Greece, University of Athens, Greek version, scheduled)

Abstract

New Messianism in contemporary Russia

Makoto Ozaki

What is meant by the historical event of the collapse of the Soviet Union concomitant with the end of the Cold War from the intellectual historical perspective? As a pioneer of post-Marxist philosophy, Vasilij Gritsenko presents a new image of the Messiah as the Buddhobot, i.e., a unity of person and machine, which reflects our age of computer-mediated information revolution in the background of Christian tradition.

According to the Judeo-Christian tradition, the Messiah is expected to appear in the future, and in Christianity the man Jesus is identified as the Messiah (Christ). In modern times, however, Nietzsche declares “God is dead”, and Heidegger waits for the Last God in the other beginning of history. Modern Russia, too, is not exempt from the Christian origin, and it might be not untenable that even a new Messiah transformed through the Internet occurs. On the other hand, Tatiana Danilchenko articulates the dialectical unification of difference and identity on the level of nation-state and culture, sharing with H. Tanabe’s Logic of Species who advocates a dialectical unification of Japanese Buddhism, Christianity and Marxism as the second religious reformation, aiming at a realization of the humankind-universality in the world.